



Taka Ishii

Gallery

1-3-2 5F Kiyosumi Koto-ku Tokyo #135-0024, Japan  
tel 03 5646 6050  
fax 03 3642 3067  
web www.takaishiigallery.com  
email tig@takaishiigallery.com

## 石田尚志《3つの部屋》2010年

1972年、東京に生まれた石田尚志は画家として出発したが、「完成して止まってしまう絵画」にあきたらず、「画面」そのものの変化や生成、崩壊、つまり「絵画の生成する時間」<sup>1</sup>を表現したい、というある種不可能な探求を1992、3年頃に始めた。

最初は、新宿の路上に紙片を糊付けたり、公園に長さ10mくらいの紙を持ち込んでライブ・ドローイングを行う。クラシック音楽を流したり、友人の演奏する現代音楽をバックにした水彩などによる描画行為は公開制作よりはパフォーマンスに近くダンスめいていた。<sup>2</sup>美術史的には「街頭に出ていく」アートの系譜が念頭にあった、という。ごく一部以外は「作品」として残っていないが、音楽のリズムやメロディーを線におきかえ、その結果が渦巻きや流れのような有機的なフォルムになる。現在にまでつながる石田作品の特徴だ。

1995年頃から、絵が動いていくことを集中的に見せるために手描きアニメーションに移行。その集大成として、音楽と密接にかかわる《フーガの技法》を2001年に厳密な方法論で制作した。こうしたアニメーション作品は映画祭や映画館など、主に映画の場で発表されていった。しかし、そもそもは絵を描く喜びを基本とする作家である。絵を見せたい、との初心に戻り映像を使ったインスタレーションの仕事も加わっていく。その結果として発表の場は美術館やギャラリーにも広がる。さらに、音楽の足立智美との協働で2005年にウィーンで即興的なドローイングを行い、ライブ・ドローイングのパフォーマンスも再開される。

この流れの中で、今回出品の2010年制作の《3つの部屋》は、本人も認めるように特異な作品である。これまで登場しなかった作家の姿が初めて画面に登場するからだ。「絵画の生成」と同時に、いわば「パフォーマンスの生成する時間」を表現する試みとなっている。

《3つの部屋》は三部構成。白いキャンバス1点を壁にかけた同一の部屋を使い、3種類の異なる状況で石田がドローイングし、3種類の映像編集がほどこされている。

《音楽のある部屋》はストレートに壁やキャンバスや窓へのドローイングを見せて、ライブ感覚が強い。バックの音楽は実際に作業の間流れていたもので、音楽の切り替えで一ヶ所途切れるほかは、約30分の映像の時間がパフォーマンスの時間にそのまま重なる。

《窓》の場合、途中で窓があげられ外の蝉の声がバックに流れる。また窓から射し込む光と影が作画の要素ともなり、さらには照明の必要な夜まで作業は続いていく。編集は短いカットをつないでいく「映画的」なもので、リアルな人間の動きは保存されている。

対して、キャンバスを描画の核とした《無音の部屋または暗くなる部屋》は、縦横にコマ単位の「アニメーション」的技法を活用、映像の速度や方向を操作し時系列を重層化させる。

さて、これまで石田の作品は、映像論や音楽論、時間論などの観点から語られてきたが、《3つの部屋》は、身体論、またパフォーマンス論からの考察も不可欠なことを示している。

何より画面に作家が不在でも、作家の身体が描画に関与しなかったことを意味しない。「そもそも画家は生々しい途上の経験として線を引いている」という2007年の言葉（多摩美術大学研究紀要）は、新たに検討されるべき問題だろう。ただ、石田における身体性は、「ドリッピング」や「ボクシング」など単一のジェスチャーに還元されるボロックや篠原有司男とは異なる。実際、ペンキのローラーや、カップとよばれるゴム刃のついた水寄せのT字型器具や、殺虫剤の業務用噴霧器などを駆使し、線を引いたり消したり重ねたりして錯綜とした空間で作業する姿は、根源的な人間の絵画衝動を体現するのだろうか。

また、パフォーマンスの過程では一瞬の出来事だが、線を引く準備としての「見る」行為の重要性も見逃せない。実際、見ることは石田の制作と切っても切れない関係にある。変化や生成、崩壊への興味は石田が、その過程をまず見ていたことを意味する。しかも、作家が作る線だけではなく、光の描く「絵」や噴霧器で引かれる「線」から、アニメーションの一コマ一コマの原画にいたるまで、「すべての形」を石田は見ているわけで、「見る時間」もまた「描く時間」同様に石田の作品と制作に組み込まれているのである。

（富井玲子 2011年9月4日）

注1. 日加タイムズ、2009年インタビュー（<http://www.nikkanews.com/Visitor/special/ishida.php>）

注2. 本稿執筆にあたり筆者による電話インタビュー、2011年9月3日を参照した。